札幌市文化財調査報告書

Ⅶ

1974

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 Ⅶ

T 310 遺　跡

1974・8

札幌市教育委員会

例　　言

1　本書は，昭和48年10月6日から10月15日にかけて実施した札幌市豊平区における南部区画整理事業の一環として行われる道路敷設に伴う遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は，札幌大学助教授石附喜三男が担当し，石附の指導のもとに，札幌市教育委員会上野秀一，羽賀憲二の2名が現場の仕事を遂行した。

3　本書の執筆は，石附の指導により羽賀が編集し，上記3名の者が各項目別に担当し，文末に文責を明記した。

4　発掘調査に際しては，札幌市南部区画整理課，株式会社丸和建設の方々に種々の配慮を受けた。記して謝意を表する。

5　発掘調査には，下記の人々が従事した。

長谷川克浩，中津欣也

北海学園大学，札幌大学考古学研究会，札幌大学ボブスレー部

6　遺物の整理，挿図浄書には，下記の人々の協力があった。

伊藤加代子，小尾栄子，中津欣也

7　石器の石質鑑定は，北海道大学理学部大学院君波和雄氏，北海道開拓記念館研究職員赤松守雄氏の石器表面の肉眼による鑑定をお願いした。

凡　　例

1　挿図は，完形土器実測図縮尺４分の１，土器拓影縮尺３分の１，石器実測図縮尺２分の１。

2　写真は，完形土器縮尺２分の１，土器縮尺３分の１，石器縮尺２分の１。

3　石器実測図中，矢印によって記した記号は，擦痕の方向を示す。

4　石器説明中ａ面とは，背面ないし実測図中の左側正面図を指し，ｂ面とは，腹面ないし右側正面図をいう。

目　　次

第1章　発掘までの経過 …… 1
第2章　遺跡の位置と環境 …… 2
第3章　発掘調査の方法と層序 …… 4
　第1節　調査の方法 …… 4
　第2節　遺跡の層序 …… 4
第4章　遺構及び出土遺物 …… 6
　第1節　ピット …… 6
　第2節　竪穴住居跡 …… 7
第5章　遺構外出土の遺物 …… 21
　第1節　土　器 …… 21
　第2節　石　器 …… 22

挿図目次

巻首図版
第1図　遺跡地形図…… 3
第2図　遺跡発掘区配置図…… 4
第3図　地層堆積図…… 5
第4図　ピット実測図…… 8
第5図　第1号竪穴住居跡実測図…… 9
第6図　第2号竪穴住居跡実測図……12
第7図　第1号竪穴住居跡(1,2)第2号竪穴住居跡
(3～13)出土土器拓影……14
第8図　第1号(1～3)第2号(4～11)竪穴住居
跡出土石器実測図……17
第9図　完形土器……21
第10図　発掘区出土土器拓影……22
第11図　発掘区出土石器実測図……23

図版目次

1　遺跡全景（北東方向より）
2A　遺跡遠景（南西方向より）
B　発掘風景
3A　第1号竪穴住居跡（北西方向より）
B　第1号竪穴住居跡焼土
4A　第2号竪穴住居跡（南東方向より）
B　第2号竪穴住居跡（南西方向より）
5A　第2号ピット（北西方向より）
B　第3号ピット（南東方向より）
6A　第1号，第2号竪穴住居跡出土土器
B　第1号，第2号竪穴住居跡出土石器
7A　第2号竪穴住居跡出土剥片
B　発掘区出土完形土器
C　発掘区出土土器
8　発掘区出土石器

本書に掲載した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭49道複，第54号

遺跡附近地形図

第1章　発掘までの経過

本遺跡の存在は，昭和10年前後にすでに知られていたと考えられる（後藤 1937）が，その後久しく発掘調査などは実施されないままに過ぎてきた。昭和39年9月，この遺跡の一角が宅地造成により破壊されるため，北海道大学の大場利夫博士らによって事前に調査がなされた（畑 1966）。その後，昭和42年6月になって，すぐ近くで農業を営む奥内雄幸氏より石附に連絡があり，また遺跡の一角に宅地造成がなされ，遺跡の上に住宅建設がなされるとのことであった。その時の緊急調査は同年7月末，札幌市教育委員会が主催し，石附が担当者となって実施したのであった。結果は，この宅地造成が水田地上に土盛りをしてのそれであり，周囲の水位との関係から湧水が激しく，かつ土器破片その他遺物の包含状況も極めて不良のため，小規模な発掘面積のまま調査を打切ったのであった。

さて，昭和47年4月，この坊主山遺跡の存在する一連の丘陵（通称坊主山）の北方裏手の水田・畑地に豊平区役所建設の具体的計画があることを知った大場利夫博士から石附に連絡があり，その建設予定地内の分布調査を行なうよう要請がなされた。分布調査は4月末から5月にかけての数日札幌大学考古学研究会の学生によって行なわれたが，遺物包含層の存在はまったく認めることができなかった。

それはさておき，この時の分布調査の際，この付近一帯の都市計画の状況を札幌市の担当係員から示され，遺跡の範囲内にも都市計画に基づく市道が設定されることが明らかになったのである。そのため，計画の実施に当っては，遺跡部分の保存措置との関係から予め関係者と十分な事前協議を必ず行なうように，関係各方面に伝えたことであった。

ここに報告する発掘調査の詳細は，その時，事前協議が必要であることを指摘した遺跡部分のそれである。当初，道路造成の計画は昭和47年中とのことであったが，諸般の事情から工事は翌年にもちこされた。そして，昭和47年の後半期において，次第に体制が充実してきた札幌市教育委員会の埋蔵文化財担当部門が，現地遺跡の状況の具体的な把握と併せて，関係諸機関との十分な事前協議を行なった末，この度の発掘調査が実施されることになったのである。（石附喜三男）

第2章　遺跡の位置と環境

本遺跡は，札幌の都心部よりみて南東方に位置する通称「平岸坊主山」と呼ばれている北北東に突出した舌状台地の北西斜面に存在する。

遺跡の地番は，札幌市豊平区平岸6条11丁目493番地の1である。

「平岸坊主山」は，標高63m程の舌状台地であり，平岸より月寒にかけて続く丘陵地帯の最西端部に存在する。これらの丘陵地帯の北東部は，一段低く豊平川扇状堆積物による平岸面（豊平面）が広がっている。「平岸坊主山」の基盤は，これに続く丘陵地帯と同様に火山灰層が厚く堆積している。これらの丘陵地帯の背後は，しだいに高まり山岳地形となり，恵庭岳附近にまで連なる。

今回の調査は，北西側傾斜面の標高52m～45mの部分に限定されたが，坊主山の傾斜面全体に土器破片，黒曜石剥片等の遺物が散乱しており，遺跡は広い範囲にわたっていた事がうかがえる。

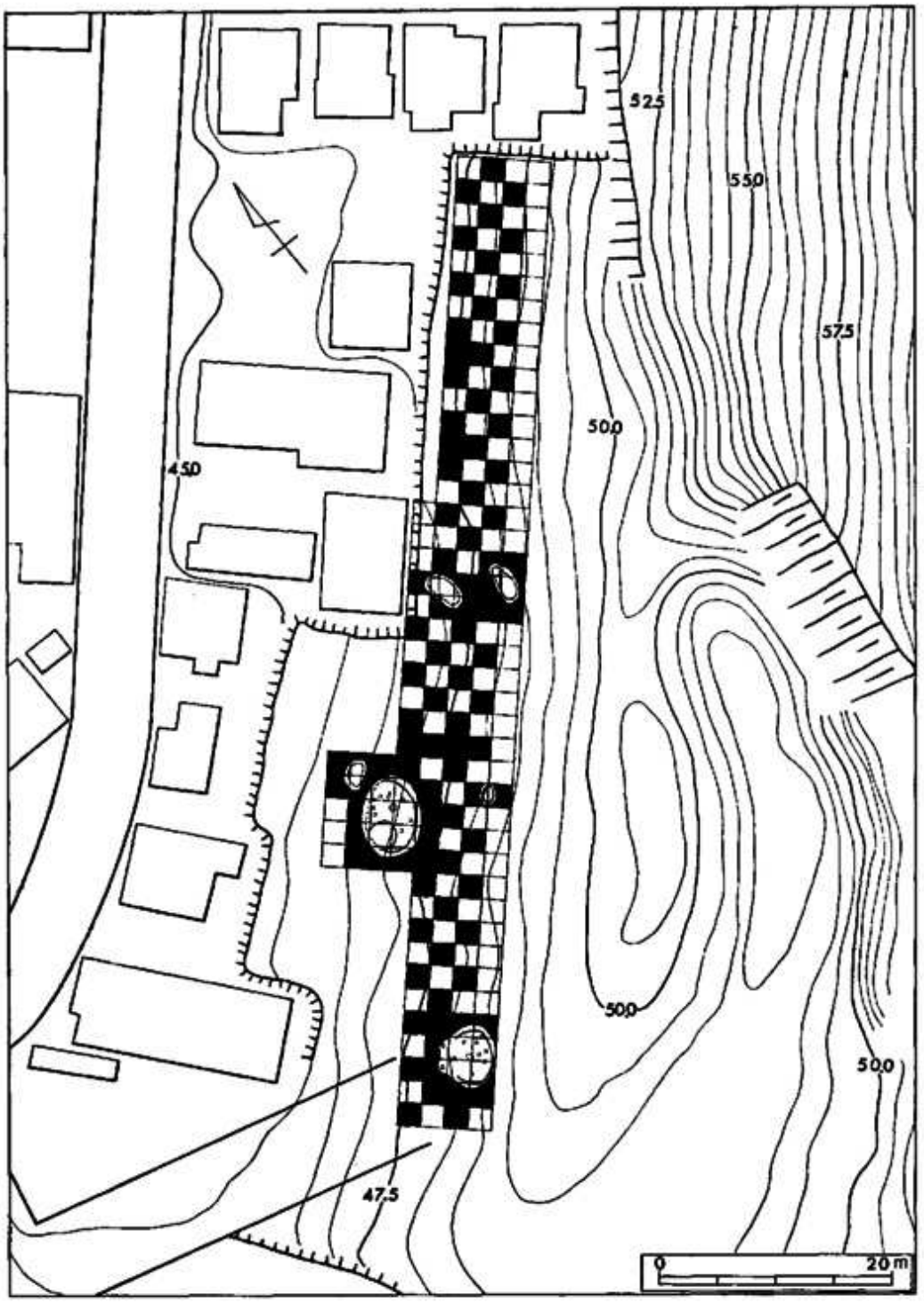
本遺跡は，昭和39年8月に宅地造成計画の際，大場利夫らによって一部緊急発掘がなされており報告もすでになされている。（畑 1966）今回行われた我々の調査区域より，約100m程北東方向に進んだ斜面上に発掘区が設定されたとのことであるが，現在ではすでに住宅が密集して建ち並びその地点を正確に知る事はできない。

前回の調査では，縄文時代早期の土器より縄文時代中期の土器（「トコロ第6類土器」，「余市式土器」，「サイベ沢Ⅶ式土器の地方化したタイプといわれる平岸天神山式土器」）縄文時代後期初頭の土器が混在して得られたという。

平岸在住で，かつて本地域一帯の地主であった奥内氏は，坊主山一帯より採集された遺物を多数保管されている。これらの遺物は，縄文時代早期より縄文時代晩期，続縄文時代，擦文時代にかけての土器，石器等で非常に幅広い時期にわたっている。

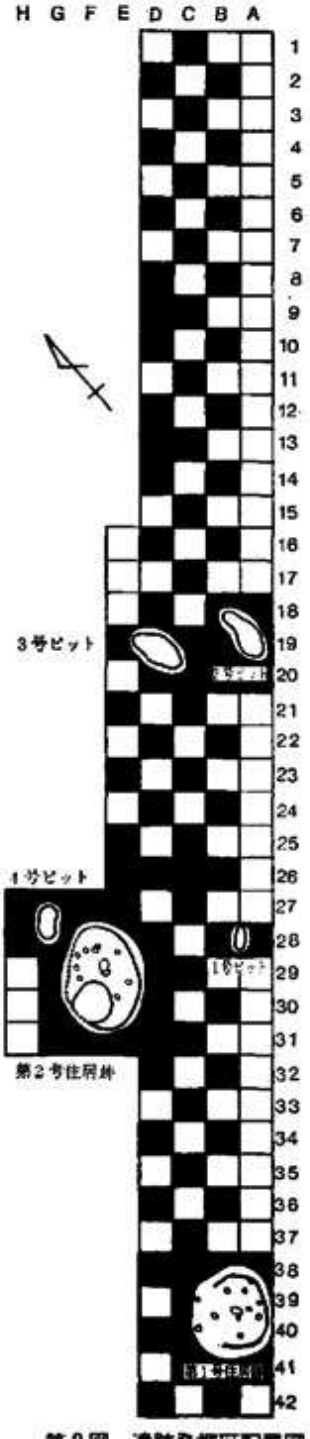
これらより見ても，人々が生活を営んだ時期は非常に長期間にわたった事が理解されよう。

（羽賀憲二）



第1図 遺跡地形図

第3章　発掘調査の方法と層序



第2図　遺跡発掘区配置図

第1節　調査の方法

本遺跡の発掘は，南部区画整理事業の一部として行われる，平岸坊主山遺跡の北西斜面を縦断する道路敷設に伴う緊急調査である。

発掘区域は，道路用敷地である為，北東―南西方向に細長い発掘区となった。

発掘区は，道路幅が8mである事より，基本的に8m×84mの敷地を2m×2mのグリッドに分割し，遺構等の発見の場合に限り拡長グリッドを設けた（第2図）。

発掘区の名称は，横にA～H区，縦に1～42区の名称を付した。

発掘対象総面積は，約800㎡で，発掘総面積は，448㎡であった。

第2節　遺跡の層序

本遺跡は，基盤が軟弱な火山灰質砂層であるのと相まって通称「平岸坊主山」と呼ばれる舌状台地の北西斜面に形成されているため，遺物包含層と考えられる黒色腐植土層は，遺構の内部及び発掘区に於いてはレンズ状を呈して部分的に残されているのみである。他の部分に関しては，全て傾斜面の下部に流失している。

本遺跡の傾斜面の基本的な層序は，以下の様な堆積を示している（第3図）。

第Ⅰ層；耕作土

第Ⅱ層；軽石を含む褐色土

第Ⅱ′層；Ⅱ層と同様だが若干暗い色調を呈する。

第Ⅱ″層；Ⅱ層より暗い色調を呈する。

第Ⅲ層；軽石と火山灰を含む茶褐色土

第Ⅳ層；軽石と火山灰を含む黒褐色土

第Ⅴ層；軽石と火山灰を含む黒色土

第Ⅵ層；軽石と火山灰を含む黒褐色粘質土

第Ⅶ層；漸移層，軽石混りの黄褐色火山灰層，茶褐色土の流入がみられ汚れている。

第Ⅶ層；軽石，火山灰を含んだ茶褐色土のブロック

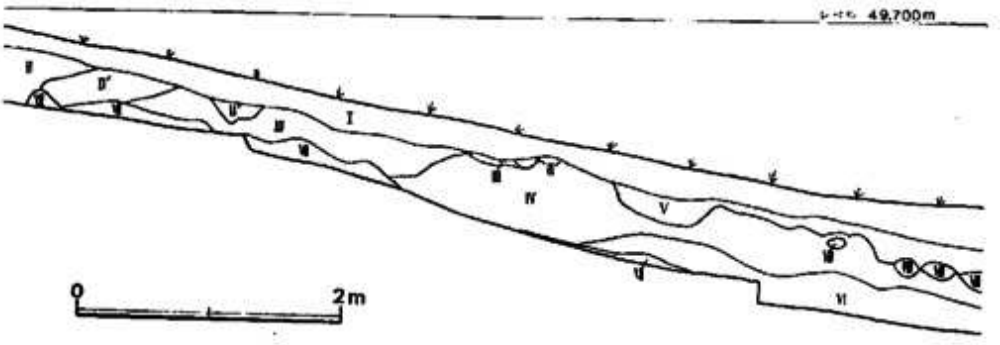
遺跡の斜面の上部は，基盤の火山灰層を直接耕作している様な状態で，全く腐蝕土層は残されてはいず，遺物等も全く見られない。

斜面の下方に至っては，上方より流入した黒色を呈する腐植土層，火山灰，軽石等が非常に厚く堆積しており斜面の地層堆積状況を示している。しかし，ここに存在する腐植土層中よりは，一切の遺物は得られなかった。

第Ⅱ層より第Ⅵ層中には，いずれも火山灰，軽石が混入している。これは，坊主山の頂上一帯が風蝕を受け，基盤の火山灰層が広範囲にわたって露出している事より，上部よりの流入と考えられよう。

尚，基盤の火山灰層は，黄褐色を呈するいわゆる「月寒火山灰層」と称されている火山灰層である。

（羽賀憲二）



第3図 地層堆積図

第4章　遺構及び出土遺物

第1節　ピ　ッ　ト

第1号ピット（第4図1）

A，B-28区にわたって存在する。長径159cm，短径115cmの若干ゆがんだ楕円形を呈する。深さは，掘り込み面より最深で30cmを数える。長軸方向は，北東一南西である。

壁の状態は，なだらかに落ち込み軟弱である。壙底面は，東北部にて若干低くなる他は平坦となっている。

遺物は，覆土中，壙底面にも一切みられない。

埋没状況は，

第Ⅰ層；暗褐色土

第Ⅱ層；黒色土

第Ⅲ層，Ⅲ'層，Ⅲ''層，Ⅲ'''層；黒色土と火山灰が混り合った層，Ⅲ層は，暗褐色を呈しⅢ'層は，黒色が強くまだら状となる。Ⅲ''層は，火山灰が少なく，Ⅲ'''層は，火山灰を多く混入している。

第Ⅳ層，Ⅳ'層；暗黄褐色火山灰質砂層，Ⅳ'層は，灰色を呈する。

第Ⅴ層；地山の黄灰白色火山灰層

第2号ピット（第4図2）（図版5A）

G-27，28区にわたって存在する。

長径183cm，短径110cmの楕円形を呈する。

深さは，掘り込み面より最深で25cmを数える。長軸方向は，北東一南西である。

壁の状態は，比較的傾斜を有し壙底面と接する部分にて丸味を帯びている。

壁面，壙底面ともに非常に軟弱である。

遺物は，覆土中，壙底面ともに一切みられなかった。

埋没状況は，

第Ⅰ層；黒色土

第Ⅱ層；暗茶褐色土

第Ⅲ層，Ⅲ'層；暗灰褐色火山灰質土層，Ⅲ'層は地山に近い色調となっている。

第3号ピット（第4図3）（図版5B）

A-18，19，20区，B-18，19区，C-18，19区にわたって存在する。

長径340cm，短径125cmのゆがんだ細長い楕円形状を呈する。深さは，掘り込み面より35cm程である。長軸方向は，北一南である。

壁の状態は，直立に近く壙底面と接する部分にて丸味を帯びなだらかに落ち込みをみせる。壙底面は，北部に一部くぼみがみられる他は起伏に富んでいる。

壁面，壙底面ともに軟弱である。

遺物は，覆土中，壙底面ともに一切みとめられなかった。

埋没状況は，

第Ⅰ層；耕作土

第Ⅱ層；灰色火山灰

第Ⅲ層，Ⅲ'層；褐色土，Ⅲ'層は若干暗い色調を呈する。

第Ⅳ層；茶褐色土

第Ⅴ層；黒色土

第Ⅵ層；漸移層である，灰褐色を呈する火山灰質砂層で若干汚れている。

第4号ピット（第4図4）

C-19，20区，D-19，20区，E-19区にわたり存在する。

長径310cm，短径140cmのゆがんだ細長い楕円形状を呈する。

深さは，斜面に掘り込まれたピットのため一様ではないが最大で73cm，最少で23cmを数える。

長軸方向は，北西一南東である。

壁は，比較的なだらかな傾斜を有し壙底面へと至る。壙底面は，平坦に近く南部分は一段高くテラス状に張り出している。西部分には若干のくぼみがみられる。

壁面，壙底面ともに非常に軟弱である。

遺物は，覆土中，壙底面にも一切みられなかった。

埋没状況は，比較的単純な堆積を示している。

第Ⅰ層；褐色土

第Ⅱ層；火山灰と軽石を含む黒色土

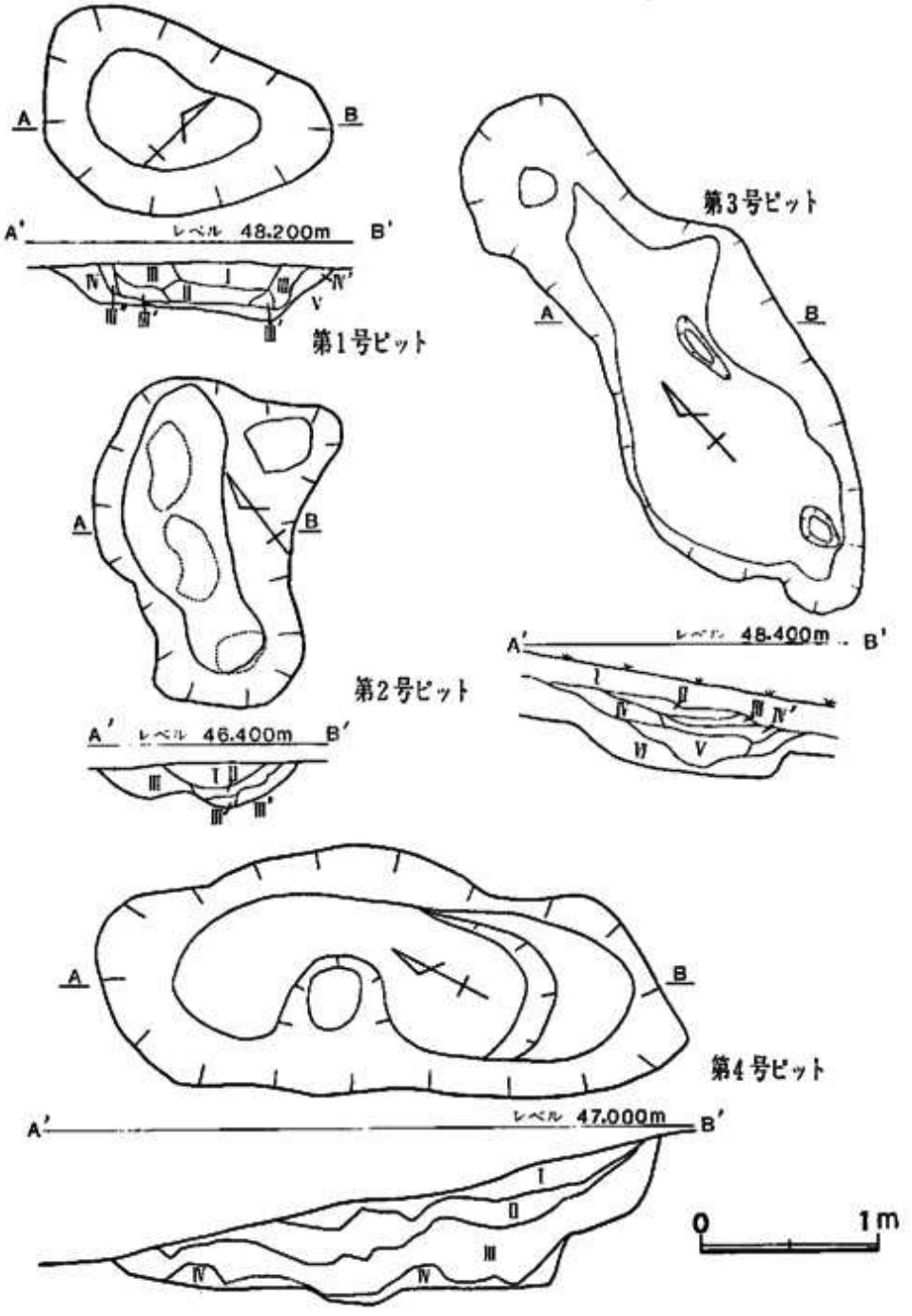
第Ⅲ層；漸移層(1)，火山灰と軽石を含んだ灰褐色で若干汚れた層

第Ⅳ層；漸移層(2)，第Ⅲ層と同様だが黄褐色を呈する。（羽賀憲二）

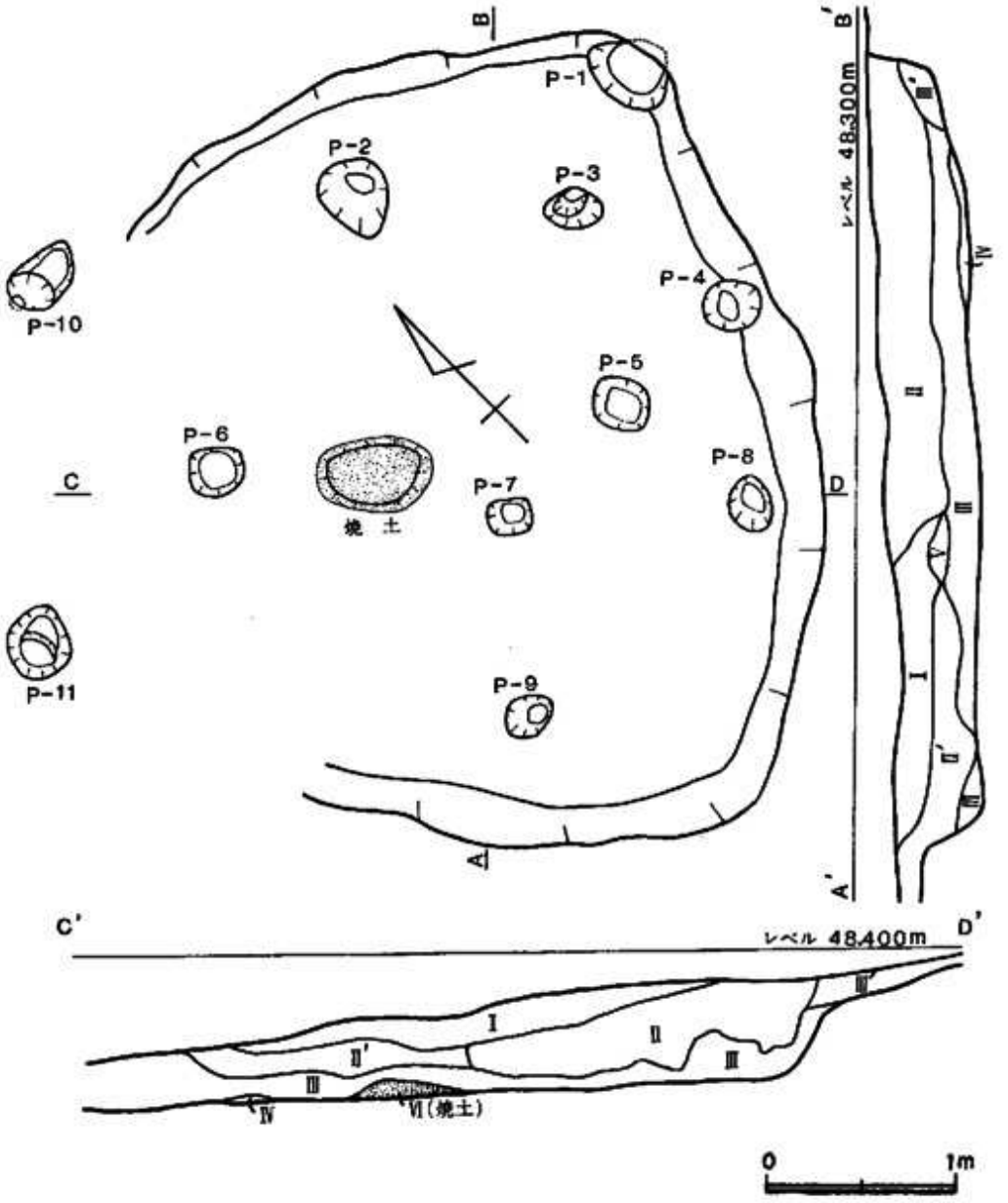
第2節　竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第5図）（図版3A）

通称「平岸坊主山」と称される舌状台地の北西向斜面に存在し，A，B，C-38，39，40区にわたって存在する。


A
B
A'
レベル 48.200m
B'
第1号ピット
第3号ピット
A
B
A'
レベル 48.400m
B'
A
B
第2号ピット
A'
レベル 46.400m
B'
A
B
第4号ピット
A'
レベル 47.000m
B'
0
1m

第4図 ピット実測図



第5図 第1号竪穴住居跡実測図

規模は，長径4.3m，短径3.8mを算する。長軸方向は，北東一南西である。

地形的には，17.5分の1の傾斜面に存在する為斜面の下方北西壁に限って壁の確認はできなかった。

プランは，五角形あるいは台形を呈すると推定される。

床面の状態は，ほぼ平坦であり基盤の火山灰層中に多く含まれている軽石をきれいに取り除き，踏みかためられた状態でかたくしまっている。

壁は，直立に近く南東部にて40cm，北東部にて30cm，南西部にて30cmを数え，かたくしまっており非常に明確な立ちあがりが確認される。

床面中央部には，炉跡と考えられる焼土のマウンドがある。

柱穴は，コーナー部の壁下にそって掘り込まれた1個（P-1），壁際にそって5個（P-2,3,4,8,9,），床面中央部に3個（P-5,6,7），北西部に2個（P-10,11）確認されている。最大の物で長径45cm，短径30cm，深さ40cmを数える物がみられる（P-1）。

P-10は，他のピットと内容物を違え植物の根を多く含んだ黒色土であり，しかも壁が軟弱な事より他の柱穴と区別されよう。

出土遺物は，非常に少なく覆土層中より接合された2点の土器破片，3点の石器が得られ，床面よりは土器底部破片1点，数十点の黒耀石剥片が得られたのみである。

第1表　第1号竪穴住居跡柱穴一覧表

柱穴	規模(cm)	深さ	内容物	備考
P. 1	45 × 30	40.0	茶褐色土	壁下に傾斜している
2	45 × 33	15.8	〃	竪穴内に向け傾斜
3	35 × 22	23.5	〃	〃
4	35 × 20	10.8	〃	壁下に傾斜
5	29 × 27	5.9	〃	
6	32 × 24	9.2	〃	
7	23 × 18	8.6	〃	
8	30 × 21	12.0	〃	壁際にある
9	28 × 22	11.5	〃	
10	45 × 23	4.7	黒色土	攪乱の可能性
11	40 × 34	13.7	茶褐色土	

埋没の状況を層序にて見ると

第Ⅰ層；黒色土

第Ⅱ層；軽石，火山灰混入の黒色土

第Ⅱ'層；Ⅱ層と同様だがクラックが入る

第Ⅲ層；漸移層であり火山灰と軽石の層が茶褐色に汚れている。

第Ⅲ'層；Ⅲ層と同様だが黄褐色を呈する

第Ⅳ層；本来の生活面と考えられる層で若干しか残されていない，基盤の火山灰層上に炭化物等が乗っており非常に汚れている。

第Ⅴ層；黄褐色土ブロック

第Ⅵ層；焼土　　（羽賀　憲二）

土器（第7図1，2）（図版6A）

土器は，第Ⅱ層中より後に接合された2点，床面中央焼土マウンド横より1点より得られなかった。

ともに斜行縄文が地文として施文されているのみで，形式表徴等は全く明らかにされなかった。

胎土中には砂礫を多く含み，若干の繊維を混入した痕跡を有する。焼成は比較的良好で色調は黄褐色を呈する。器厚は0.8～1.2cmである。

これらの土器破片のみで，本竪穴住居跡の構築年代を推定するのは不可能と思われる。

後に記するが，本遺跡遺構外の発掘区より出土の土器群に類例を求めるならば「トコロ第6類土器」に胎土，焼成，色調等は近似しているが，確証は得られていない。　　（羽賀　憲二）

石器（第８図1～3）（図版６Ｂ）

石器は，覆土中，第Ⅱ層中より３点得られている。全例黒曜石製である。

1.　縦長剥片を素材にして，側縁に細かい剥離を加えている。ｂ面には一切加工は加えられていない，削器である。

2.　縦長剥片を素材とした削器に類する石器である。

ａ面の両側縁に細かい加工がなされる。左側縁部には，細かい剥離のくり返しによるえぐり込みが入れられている。

3.　厚手の縦長剥片を素材とした，掻器に類する石器である。

エッヂ両側縁に，背の高い面をもつよう加工がなされている。下部にも加工がなされている。ｂ面全体に，乱雑な擦痕が観察される。　（羽賀　憲二）

第２号竪穴住居跡（第６図）（図版４Ａ，Ｂ）

本竪穴は，平岸坊主山のすその標高46.5m～47mの緩傾面に立地している。

Ｅ-28，29，30区，Ｆ-28，29，30区，Ｇ-29，30区にかけてある。

大きさは，長軸６ｍ，短軸4.1mの南西側が大きく，北東に向って狭る卵形に近い長楕円形を呈する住居跡である。長軸は，ほぼ北東―南西の方向である。住居跡の西には，大きな攪乱穴があり，また中央焼土付近にも，小さな攪乱による穴がある。

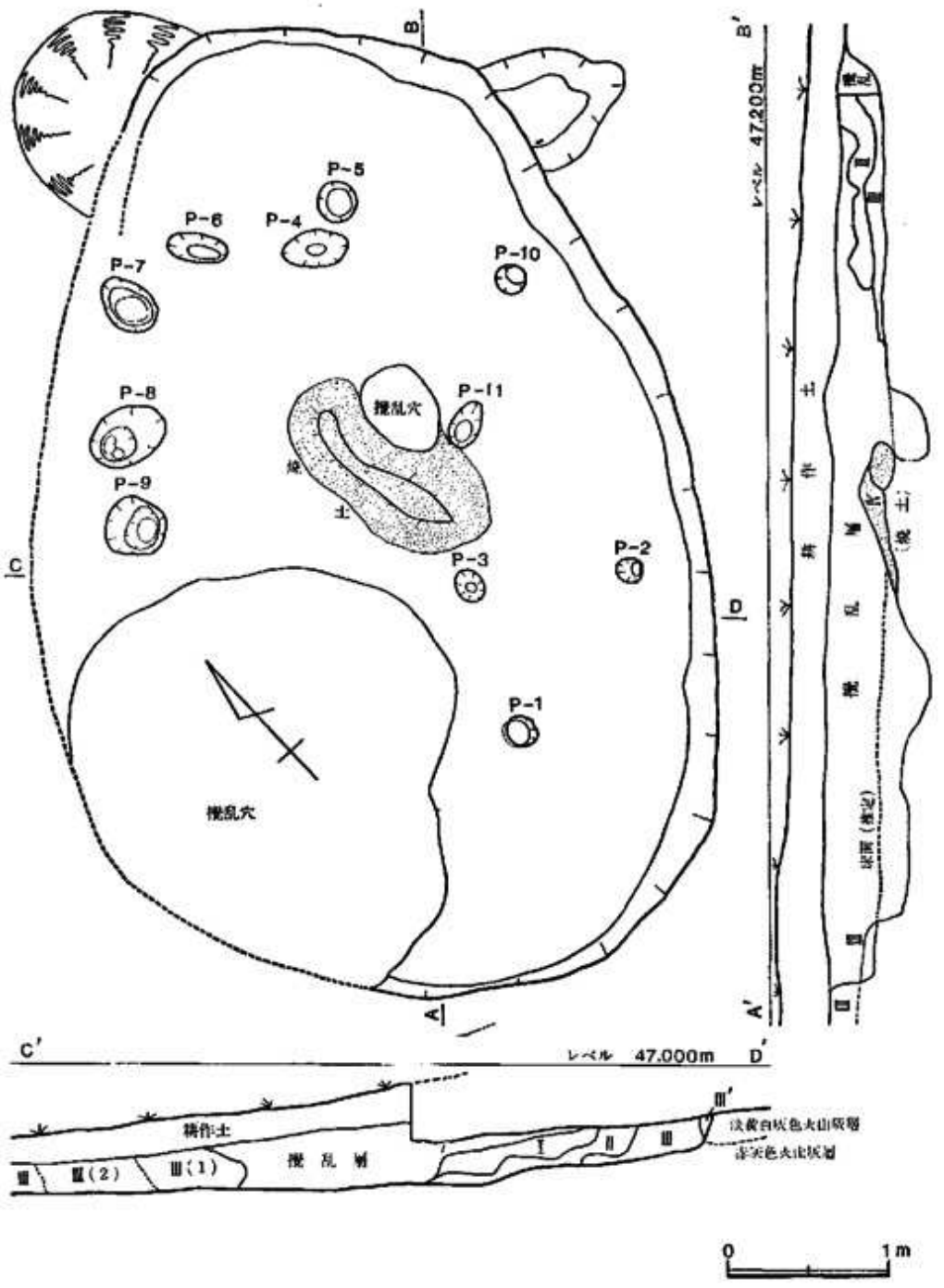
立ち上りは，立地している場所が傾斜面のため，斜面下方北西側の立ち上りは，明確には確認し得なかったが，それ以外の南～東にかけては，ほぼ垂直に近く，北東部は45度の角度で立ち上っている。壁高は，8～27cmである。中央付近に，15cm程の後述する第Ⅳ層―黄褐色火山灰―の高まりがあり，150×75cmの大きさで焼けていた。炉跡に相当するものであろう。

柱穴は11個みつかっているが，内別は，第２表の通りである。内容物の検討から，黒褐色土の詰まっているピット1，2，5，7，8，9の６個が，同時期のものである事が判る。ピット3，4，10は，内容物が暗褐色土であり，異なる時期のものである。尚ピット6，11は不明である。

この内，特に深いものは，黒褐色土の詰まったピット１，５，７，８，９の５本で，主柱穴と思われる。深さ25.3～50.6cmを算する。大きさは，ピット1，2，5が，各々17×20，16×20，23×25cmで，単穴のものであり，ピット7，8，9は壙口が少し拡がっていて二段構造で，壙口の大きさは，28×39～33×48cmである。下段は，19×22～20×30cmで，単穴のものの大きさとほぼ同様である。

茶褐色土の詰まったピット3，4，10は，深さは7.1～5.0cmで，一般に浅く，すべて単穴で，大きさは，17×21～23×41cmである。

尚，ピット１は，壁に向って少し傾斜し，またピット８は，住居跡中央に向って傾斜している。これら，主柱穴の配列は，壁に沿ってきれいに並んでおり，南東壁に２個，北西壁に３個，北東壁に１個ある。２段構造の30cm以上の深いピットは，斜面の下側にあたる北西壁に３個並んでいるのは，地形と上屋構造とが何らかの関係をもっていたのか，或いは，柱穴の建て替えを意味するのか



第6図 第2号竪穴住居跡実測図

も知れない。尚，住居跡の西側には大きな攪乱穴があるが，ここに少なくとも1個の柱穴があった可能性があり，全部で柱穴は7～8個位かと思われる。

床面は，地形に沿って少し傾斜しており，その面は，ほぼ平坦である。とりわけ，住居跡の南東部半分は，全く平坦である。この南東部では，床面は地山の下部―赤灰色火山灰層―の最上面に当っている。尚，焼土部分のすぐ西側は，少し窪んでいた。

本住居跡覆土の堆積状態は，攪乱が大幅に入っているため，不明瞭なところが多いが，C-Dセクションの南東部で観察すると，基本的には，

第Ⅰ層；黒色土

第Ⅱ層；暗灰褐色火山灰質土

第Ⅲ層；暗黄灰褐色火山灰質土

である。第Ⅲ層は，漸移層で，住居跡内に，流れ込んだものであろう。

尚，第Ⅲ′層は，全体に火山灰を多く含み，第Ⅲ層(1)と(2)は，各々灰褐色，黄褐色味が強い。

地山は淡黄白灰色火山灰層と赤灰色火山灰層とに分けられた。

尚，住居跡の北東部両側に，浅い皿状のピットが，各1個あった。住居跡とは切り合い関係にあり，付属するものではない。（上野秀一）

第2表　第2号竪穴住居跡柱穴一覧表

柱穴	規模(cm)	深さ	内容物	備考
P―1	17 × 20	25.3	黒褐色土層	傾斜（壁に向かって）
2	16 × 20	8.4	〃	底面中央に向かって傾斜
3	17 × 21	7.1	茶褐色土層	
4	23 × 41	15.0	〃	
5	23 × 25	21.9	黒褐色土層	
6	17 × 36	9.7	不明	
7	28 × 39 20 × 30	37.8	黒褐色土層	二段
8	33 × 48 19 × 22	12.6 50.6	〃	〃
9	36 × 36 19 × 27	35.4	〃	〃
10	18 × 18	9.8	暗褐色土層	底面中央に向かって傾斜
11	18 × 30	18.0	不明	

土器（第7図3～13）（図版6A）

本竪穴住居跡の構築年代を決定するに足る十分な量の土器は得られてはいない。

攪乱層出土土器（5，6，9，12，13）

口縁部に折り返えしによった肥厚帯を作り出し断面が三角形となり平縁である。

肥厚帯上には，絡条体圧痕文を2段施文しその間に半截竹管状工具の内面を使用した連続刺突文を施文する。頸部には，肥厚帯上に施文されたと同趣の絡条体圧痕文を数段施文する。(6)

羽状縄文を有する胴部片(5)，細い縄文が施文されている(9)。乱雑に縄文が地文として施文される(12)。

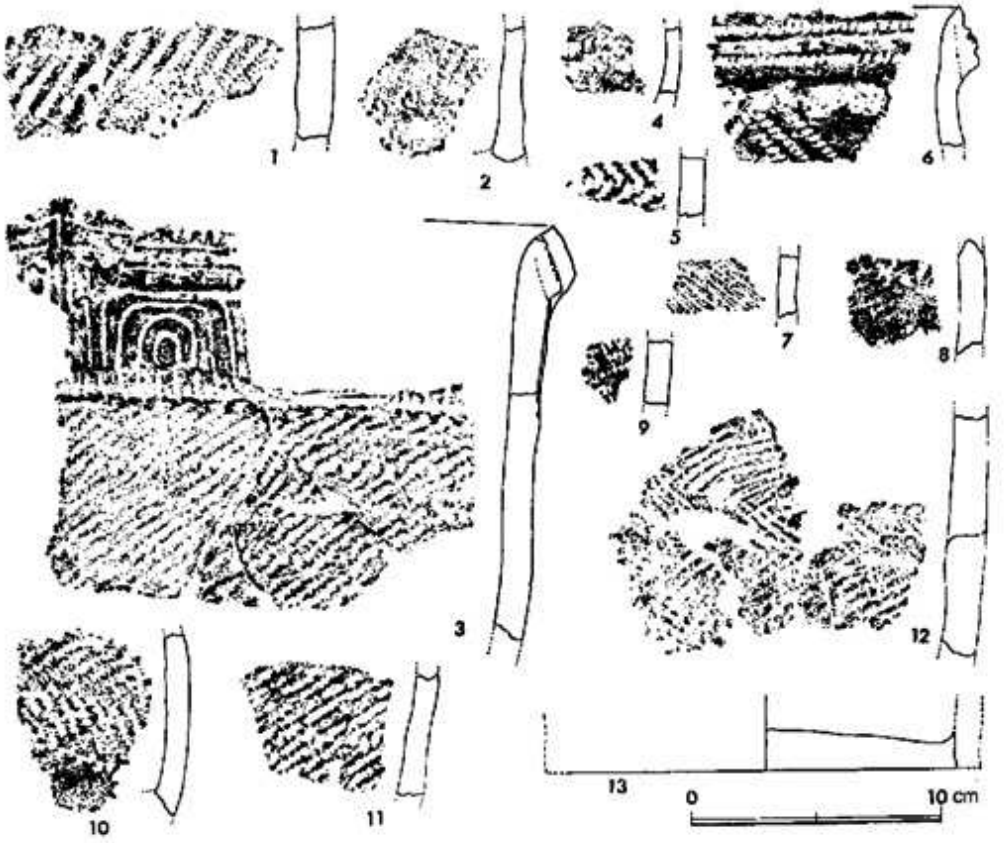
底面は平らで，内面中央部が若干盛り上り，筒形を呈するであろう底部破片(13)。

12を除いて，胎土中に砂粒，石英を多く含み多量の繊維を混入した痕跡を有している。

焼成は，非常に良好であり，色調は赤褐色を呈する。土器内面は，全てていねいに研磨されている。

器厚は，1.0cm内外であり，器形は円筒形の深鉢形となろう。

12のみ特異な土器である。胎土中には，小石を多く含み，繊維を若干含んだ痕跡を有している。



第7図　第1号竪穴住居跡（1.2）第2号竪穴住居跡（3～13）出土土器拓影

焼成は粗く，色調も黄褐色を呈する。

12を除く土器は，ほぼ同一のグループを形成していると考えられよう。

漸移層出土土器（第7図3,7,8,10,11）

3は，口縁に小突起を有し，断面が三角形となる折り返えしによる肥厚帯がある。

口唇上には撚糸圧痕によるきざみが施文され，肥厚帯上には，上より撚糸圧痕文，半截竹管状工具の内面を使用した連続刺突文，撚糸圧痕文，半截竹管による連続刺突文の順に施文する。

頸部下には，隆起帯を思わせる高まりがめぐっており，その上に半截竹管による連続刺突文が施文される。

肥厚帯部下より，隆起帯までが文様帯となり撚糸圧痕文がU字状の弧を画く文様が施文される。胴部には，地文として結節斜行縄文が施文される。

それ以外には，斜行縄文がみられる胴部破片（4,8,11），細かい縄文が有りあやくり文が見られる

もの（7），羽状縄文が施文され，内面に炭化物が付着している底部破片（10）などがある。

いずれも胎土中に砂粒，石英を多く含んでおり，多量の繊維を混入した痕跡を有している。焼成は，良好である。色調は，茶褐色（3,7,11），黄褐色（5,8,10）を呈する。土器内面は，全てていねいに研磨され，なめらかに調整されている。

器厚は，1.0cm内外であり，器形は，胴部が全く張り出さない円筒形の深鉢形となるであろう。

本竪穴住居跡にて，形式表徴が明らかにされる土器は，攪乱層，漸移層中より各1点ずつしか得られていない。

これらより本竪穴住居跡の構築年代を決定するにはあまりに資料不足といえよう。

本竪穴住居跡出土の土器は，絡条体圧痕文の存在，文様帯を隆起帯によって区分する点，胴部にて全く張り出しをみせず円筒形の器形となる点，繊維を多量に含んでいる点等，一般的に考えられる円筒上層式土器のグループとは，大きく趣を異としている。形態的にのみ考えるならば縄文時代前期の円筒下層式土器の特徴に類似する。

しかし，口縁部に折り返えしによる肥厚帯を作り出す事，半截竹管状工具による連続刺突文の存在等比較的新しい要素がうかがえる。

3には，結節斜行縄文が施文され，5,10には，結節羽状縄文が施文されている。

高橋によれば「結節羽状縄文は，円筒土器群の古武井式土器より一般的に用いられ……斜行縄文はサイベ沢Ⅶ式土器になって用いられている。」（高橋1972b）という。

これより考えても，本竪穴住居跡出土の土器は，「サイベ沢Ⅶ式土器」より以前にさかのぼって考える事はできない。

「サイベ沢Ⅶ式土器」は，円筒上層式土器の最終末に近い時期に位置付けられる土器群である。分布範囲も広く石狩低地帯より道北部にかけて，地方色の強い土器群を残している。

半截竹管状工具の内面を連続的に刺突して連続刺突文を特徴とする文様は「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化したタイプと称されている「平岸天神山式土器」（菊地1967），「智東B式土器」（山崎1966，山崎，長谷川1968）に良くみられる。

「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化したタイプと称されている土器群に類する資料を出土する遺跡は，本遺跡周辺に於いては「平岸天神山遺跡」（菊地1967），「平岸坊主山遺跡」（畑1966），「白石神社遺跡」（札幌市教委1973）があげられる。

「平岸天神山式土器」は，器形は胴部の張った深鉢形であるが，発達した棒状の特異な4個の突起を有し，口唇部は厚く肥厚し段を有している。この突起，肥厚部に数段の半截竹管状工具による連続刺突文を施文する。

また地文としての縄文は，ほとんどの物が斜行縄文が施文され羽状縄文が施文される物はまれにしか見られないという。

「サイベ沢Ⅶ式土器」は，サイベ沢B遺跡の第2号，3号竪穴住居跡の切り合い関係，土器のセット関係，羽状縄文の有無より，2分される可能性が指摘されている（高橋・森田1967）。

高橋は，この論をさらに進めて，「平岸天神山式土器」には，羽状縄文がほとんどみられない点

に留意し，「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化したタイプの土器群中結節羽状縄文のみられない石狩低地帯に於けるサイベ沢Ⅶb式土器と考えている。

本竪穴住居跡出土の土器は，「平岸天神山式土器」とは器形文様構成等に大きく差位がみられ，結節羽状縄文，結節斜行縄文が存在している。

先に記した理由で，本竪穴住居跡出土は「サイベ沢Ⅶ式土器」より以前に位置付けがなされる事は考えられず，少なくとも結節羽状縄文の存在を考えると「平岸天神山式土器」より若干古く位置付けがなされる可能性がある。

名寄智東B遺跡では，「平岸天神山式土器」と同様に，「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化したタイプの土器群を出土している（山崎1966，山崎・長谷川1968）。

智東B式土器と称されており，これには結節羽状縄文が良くみられる。高橋は，智東B式土器は「サイベ沢Ⅶ式土器」の古いタイプ，すなわち結節羽状縄文を有する「サイベ沢Ⅶa式土器」の道北部にて地方化した土器と考えている（高橋1972b）。

本竪穴住居跡より出土した土器は，今の所類例がみられない。

前述して来たが「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化したタイプと称されている「平岸天神山式土器」にきわめて近い時期の物と考えられよう。　（羽賀　憲二）

石器（第8図4～11）（図版6B）

石鏃（4～6）いずれも入念に両面加工が施こされている。

発達した逆刺があり，左右は非対称形で，有柄である（4）。

幅広剥片を素材にして，a面左上に若干の自然面を残し，b面には大きく第一次剥離面を残し柳葉形である（5）。

縦長剥片を素材にして，b面右側に第一次剥離面を残す。有柄であり，弱い逆刺があり，尖端部を一部欠損している（6）。

幅広剥片のa面左側縁に加工が集中してなされている削器（7）。

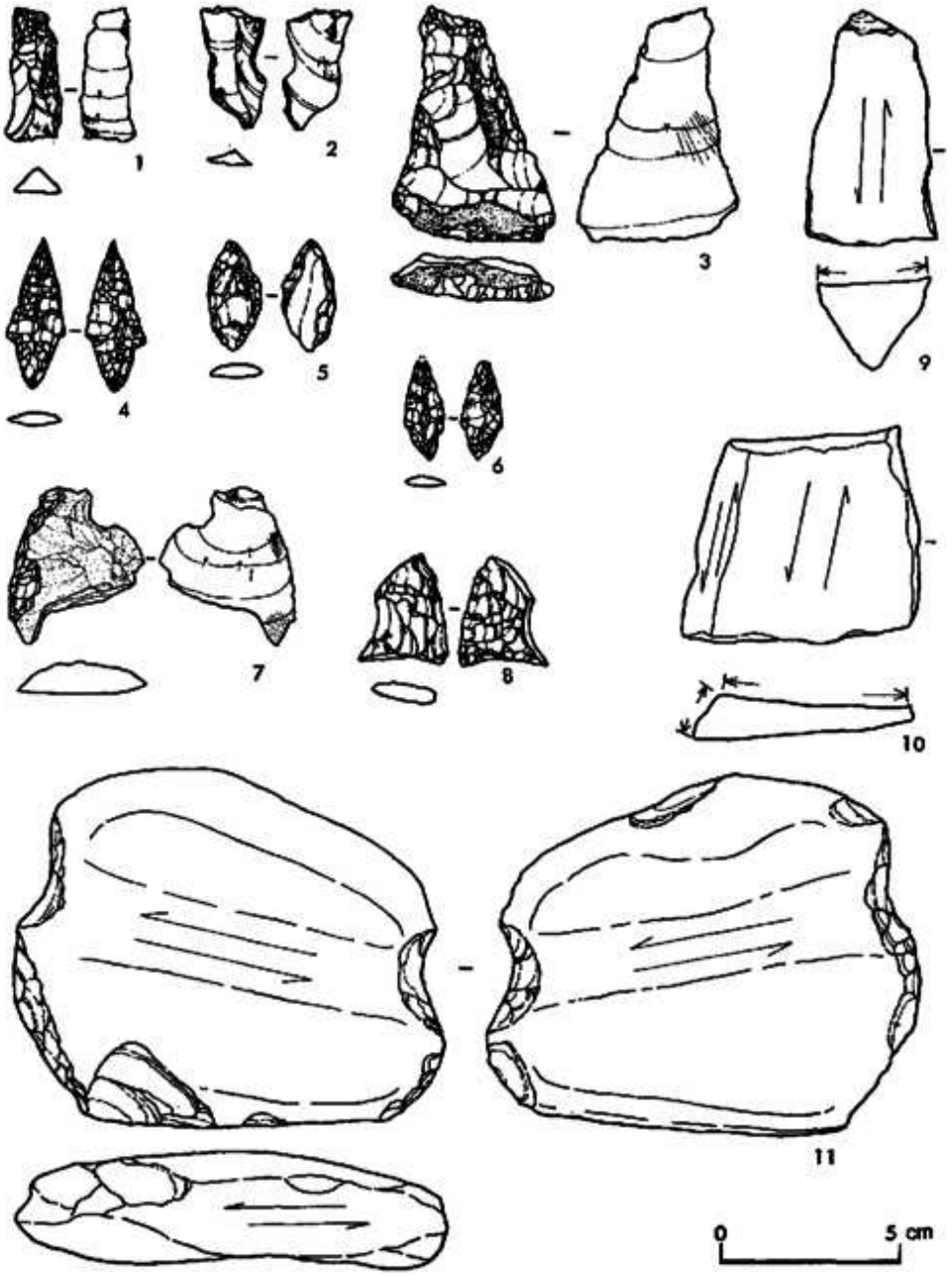
両面加工が施こされた石器の破片（8）。

石皿，あるいは擦石の破片であろうと思われる縦方向の擦痕のみられる破片（9）。

砂岩を利用した砥石，2面にわたって使用された痕跡を有する（10）。

11は，偏平な楕円状を呈する河原石の長軸両端に数度の打撃を加ええぐりを入れさらに研磨している。両端のえぐりを結ぶ線上は，研磨されU字状にくぼみを有している。下端の面は，平坦でありくり返しの敲打と擦痕がみられる。石冠と考えられるが，擦痕が存在する面の幅は狭く1cm内外である点が特徴である。形状のみを考えるならば，大型の石錘とも考えられる石器である。

（羽賀　憲二）



第8図　第1号（1～3）第2号（4～11）竪穴住居跡出土石器実測図

縄文時代中期の竪穴住居跡について

北海道に於いては，縄文時代全整にわたって竪穴住居跡の発掘例は少ない。

今回我々の調査で，縄文時代中期に属すると考えられる２基の竪穴住居跡が発見された。

縄文時代中期の竪穴住居跡の発掘例は，非常に少なく発見されていても完全にプラン，構造等を掌握した物は少ない。

本遺跡にて発掘された竪穴住居跡の場合も例外ではなく，第１号竪穴住居跡，第２号竪穴住居跡ともに傾斜面に構築されたため，斜面の下方の壁が確認されていない。

しかし，全体の４分の３程度の壁は確認されており第１号竪穴住居跡は，隅丸の五角形あるいは台形に近いプランと推定され，第２号竪穴住居跡は，一方がすぼまった卵形の楕円形状を呈すると推定された。

第１号竪穴住居跡の場合，時期決定に足る土器が得られておらず，その所産構築年代を明らかにする事はできなかった。

第２号住居跡の場合も，出土している土器が明確に本竪穴住居跡に伴ったとはいい切れない。しかし出土した土器の量は，非常に少ないがほぼ同一のタイプの物であろうと推定される。

土器は，多量の繊維を含んでおり胴張りのない円筒形の深鉢形である。器形的には，円筒下層式土器の特徴をもっているが，地文として施文される結節羽状縄文，結節斜行縄文，口縁部の折り返えしによる肥厚帯，半截竹管状工具による連続刺突文の存在等「サイベ沢Ⅶ式土器」より以前に逆のぼって位置付けがなされる事はないであろうが「サイベ沢Ⅶ式土器」にきわめて接近した時期の所産という事ができよう。

当該時期に属する竪穴住居跡の類例は，本遺跡の近隣の「白石神社遺跡」（札幌市教委1973）に於いて，造成工事等により大部分破壊され，３分の１程残された竪穴住居跡が一基発掘されている。

道南部では，見晴町遺跡（高橋1966），サイベ沢Ｂ遺跡（高橋・森田1967）に於いて竪穴住居跡の発掘例が報告されている。

見晴町遺跡，サイベ沢Ｂ遺跡２号，３号竪穴住居跡は，住居跡の重複と相まって道路工事等による破壊により明確なプラン，構造は明らかにされていない。

サイベ沢Ｂ遺跡の第１号竪穴住居跡のみが，完全な形にて発見された唯一の例である。

これより出土している土器群は，「サイベ沢Ⅶ式土器」に後続する「見晴町式土器」である。

小判形のプランを有し，長径6.6ｍ，短径4.6ｍを有し，周壁は垂直をなし現存で40cmを数える。床面の中央に２カ所の焼土の集積が認められ，五角形を呈する様柱穴が五個配列されている（高橋・森田1967）。

見晴町遺跡にて発見された竪穴住居跡は，完全な形で発掘がなされておらず農道工事により半分程削り取られている。

現存部にて，東西4.5ｍ，南北約５ｍでプランは隅丸方形と推定されている。壁は，直立で15cmを数える。床面上に焼土の集積が２カ所認められ，19個の柱穴が床面上より発見されている。

柱穴の配列状態，壁の状態より複合住居跡の可能性がが考えられている（高橋1966）。

サイベ沢B遺跡の第1号竪穴住居跡と見晴町遺跡は，伴に「サイベ沢Ⅶ式土器」に後続する「見晴町式土器」を出土している。この事よりこれらの竪穴住居跡は「見晴町式土器」の時期に構築されたと考えられよう。

「サイベ沢Ⅶ式土器」の時期の竪穴住居跡は，前述したサイベ沢B遺跡にて2基発見されている。

第2号竪穴住居跡は，西側を農道によって削り取られ，東側2分の1程が残されているにすぎない。プランは推定により，円形ないしは楕円形であろうという。

第3号竪穴住居跡は，第1号竪穴住居跡，第2号竪穴住居跡の構築により，破壊されかろうじてその存在が確認されたにすぎない。

本遺跡に於いて発見された，第2号竪穴住居跡は，ほぼ楕円形を呈し，小判形に近いプランとなる。類似点を求めるならば，サイベ沢B遺跡の第1号竪穴住居跡に非常に類似している。しかし，サイベ沢B遺跡の第1号竪穴住居跡は，楕円の短軸の一辺が直線的になっており，柱穴の配列等に差位がみい出される。

また本遺跡にて発見された，第1号竪穴住居跡からは土器片が2点より得られておらず構築年代等の時期的な判断は下せなかった。

土器は床面，覆土層中より各1点ずつ得られている。胎土，焼成，色調は，非常に類似している。同一タイプの土器と考えられよう。本遺跡出土の土器中に類似の資料を求めるならば，発掘区より得られた「トコロ第6類土器」の胎土，焼成，色調等に類似点が見い出されている。しかし，形式表徴が全くわからない為「トコロ第6類土器」と決めることはできない。

「トコロ第6類土器」の竪穴住居跡は現在まで数例報告されているが，明確なプラン，構造等を明らかにした物はほとんどない。

女満別町住吉にて1基（大場・奥田1960），雄武町当沸にて3基の報告（山崎1966）がみられる。

女満別町住吉にて発見された竪穴住居跡は，長径7.6mの円形に近いプランを有し，段のある竪穴である。プランが非常に不定形である事と，柱穴の位置関係等より考えても住居跡としての条件は不備であるといえよう。

雄武町当沸遺跡に於いて発見された住居跡は，3基である。第2号竪穴，第6号竪穴，第7号竪穴が住居跡と考えられている。

第2号竪穴は，不定形で床面が高低2段になるといった特徴を有している。床面上に焼土は，認められていない。

第6号竪穴，第7号竪穴も第2号竪穴と同様にゆがんだ不整円形のプランを呈している。これらには床面上の炉跡と考えられる焼土の集積が認められ，竪穴住居跡と思われる条件をそなえている。

女満別町住吉，雄武町当沸遺跡に於いて発見された竪穴住居跡と考えられている物は，いずれも他に類例がみられない程特異なプラン，形態を呈している。

これらは，本遺跡にて発掘された第1号竪穴住居跡とはプラン，構造に大きく差位がみられる。

縄文時代中期に属するであろう，五角形のプランを有する特異な形態の竪穴住居跡の事例は，道南の尻岸内町口の浜遺跡，同町川上遺跡にて発見されている。いずれの竪穴住居跡も縄文時代中期初頭の所産と考えられ，円筒上層a式土器に比定される「勝山館Ⅲ式土器」を出土している。

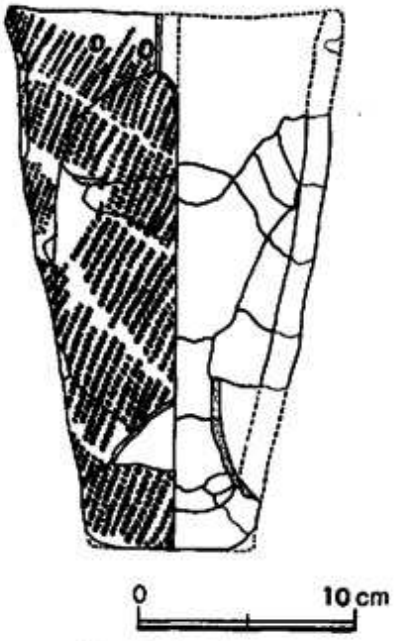
竪穴住居跡の構造は，楕円形の掘り込みがまずあり，その中をさらに五角形に掘り下げ床面が高低2段存在する。柱穴は，各コーナーに付属して設けられている（吉崎1965）。

本遺跡にて発見された第1号竪穴住居跡は，五角形ないしは台形に近いプランとなろうと推定される。時期的に見てもかなりのへだたりがあろうが，形態的には類似点が見出せよう。

（羽賀　憲二）

第5章　遺構外出土の遺物

第1節　土　　器



第9図　完形土器

完形土器（第9図）（図版7B）

口径15.5cm，高さ24.8cm，口縁は，平縁であり，器形は，円錐形の深鉢形となる。底面は，平らである。

口縁部に，円形工具の先端を刺突した円形刺突文（内面突瘤文）をめぐらす。しかし，その間隔は均一ではなく，間隔が狭い部分と広い部分がみられる。

口縁部より底部にかけて，縄文を地文として施文する。

縄文の原体は，3cm程の単節に撚った紐を使用している。

器厚は，1.2cm内外である。

胎土中には，砂礫を多く含んでおり若干の繊維を混入した痕跡を有している。

焼成は，良好であり色調は，褐色を呈する。

「朝日トコロ貝塚」出土の「トコロ第6類土器」（東大文学部1963）によって代表される土器である。近隣では，白石神社遺跡（札幌市教委1973），平岸坊主山遺跡（畑1966）等にみられている。　（羽賀　憲二）

発掘区出土遺物

発掘区出土土器（第10図）（図版7C）

遺構外の発掘区より出土した土器は，非常に少なく表採資料を加えてもわずか10片にみたない。

口唇上，口縁部に一条の撚糸による押圧文が施文される（1）。

口縁部付近に半截竹管状工具を使用した，2本単位の沈線文が施される（6）。

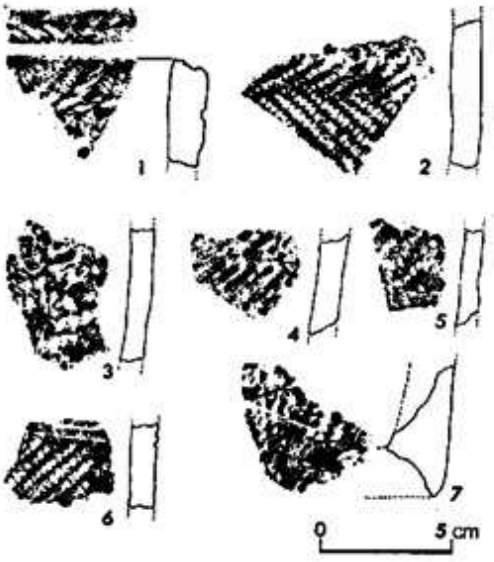
地文の縄文のみうかがえる胴部土器破片（2～5）。

縄文時代中期の土器であろう底部土器破片（7）。

胎土中に，砂粒を多く含んでいる物（2～4,6），若干の繊維を混入したと思われる痕跡を有する物（1,5,7）。

焼成は，全て良好である。色調は，赤褐色（2～4,6），茶褐色（5），灰褐色（1,7）を呈する。

器厚は，全て1cm内外である。　（羽賀　憲二）



第10図　発掘区出土土器拓影

第2節　石　　器

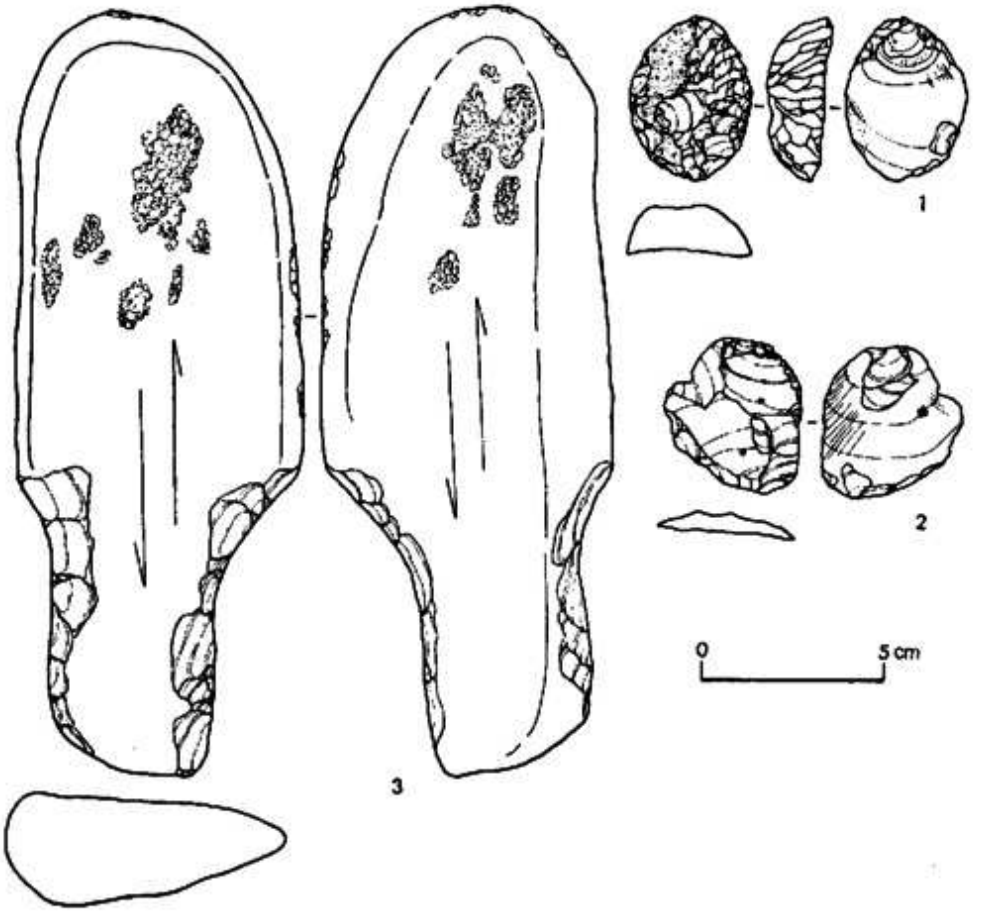
発掘区出石器（第11図）（図版8）

黒曜石の円礫を分割し，第1次剥離面のエッヂより上に向けて背の高い面をもつ様加工が全周に施こされる。いわゆる円形削器と称される石器に類する。第1次剥離面には，乱雑な擦痕がみられる（1）。

幅広の薄手剥片のエッヂに若干の加工が施こされる削器に類する石器である。第1次剥離面には一切の加工痕は認められない（2）。

大型の長い偏平な楕円形の河原石に加工を加え，手で握る部分を作り出している。a，b両面ともに，長軸方向に向けての細かい擦痕がみられる。a面中央上部，b面中央上部，腹部に細かい叩打のくり返えしによると考えられる痕跡がみられる。たたき石としての用途が考えられる。

（羽賀　憲二）



第11図 発掘区出土石器実測図

引用・参考文献

大場利夫・奥田　寛　1960　『女満別遺跡』

菊地俊彦　1967　「札幌市平岸天神山出土の土器について」「北海道考古学」3所収

後藤寿一　1937　「札幌市及び其附近の遺跡・遺物の二，三に就て」『考古学雑誌』27—9所収

札幌市教育委員会　1973　「白石神社遺跡」『札幌市文化財調査報告書』Ⅰ

高橋正勝　1966　「函館市見晴町遺跡の資料」『北海道青年人類科学研究会会誌』No. 8所収

高橋正勝　1972 a「北海道における縄文時代中期の終末(1)」『北海道青年人類科学研究会会誌』No. 9所収

高橋正勝　1972 b「北海道における縄文時代中期の終末(2)」『北海道青年人類科学研究会会誌』No.10所収

高橋正勝・森田知忠　1967　『サイベ沢B遺跡調査報告』

東大文学部　1963　『オホーツク海沿岸，知床半島の遺跡』上巻

畑　宏明　1966　「札幌市付近の遺跡—資料篇—Ⅱ，札幌市平岸坊主山遺跡」"Aynu Moshiri"Ⅱ所収

山崎博信　1966　『当別遺跡』第1報

山崎博信　1966　『智東B地点図録篇』

山崎博信・長谷川功　1968　『智東B地点—本文篇』

吉崎昌一　1965　「縄文文化の発展と地域性Ⅰ，—北海道—」『日本の考古学』Ⅱ所収

第3表　石器計測値一覧表

No.	出土地点	層位	類別	全長(mm)	全幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
8-1	1号住	Ⅵ	削器	36.5	13.5	7.0	3.2	Obs	
2	〃	Ⅱ	〃	33.0	17.0	4.5	2.1	〃	抉入がある。
3	〃	Ⅱ	掻器	63.5	44.0	12.5	24.5	〃	主剥離面に擦痕あり
4	2号住	Y	石鏃	42.0	16.0	4.0	1.7	〃	有柄
5	〃	Y	〃	31.0	14.5	3.8	1.8	〃	
6	〃	攪乱	〃	29.0	11.5	2.5	0.8	〃	有柄，尖頭部1部欠損
7	〃	炉上	削器	43.5	35.5	9.0	4.2	〃	
8	〃	Y	ナイフ状石器	29.0	23.8	4.8	3.9	〃	両面加工が施こされた石器の破損品
9	〃	Y	石皿	(65.0)	36.5	24.0	(4.1)		石皿の1部が欠損したもの
10	〃	床面	砥石	58.0	63.2	12.5	68.1	Ss	
11	〃	Y	石冠	120.0	102.0	25.0	500.0	An	
11-1	D-6	S	円形削器	45.0	33.0	12.0	24.9	Obs	主剥離面に擦痕あり
2	B-22	B	削器	41.5	37.0	5.2	8.4	〃	
3	D-4	S	たたき石	208.0	78.0	30.0	525.0	An	

略号　層序　S；攪乱層　B；黒色土層　Y；漸移層

石質　Obs (Obsidian)；黒曜石　Ss (Sand Stone)；砂岩　An (Andesite)；安山岩

図 版 1

遺跡全景（北東方向より）

図 版 2

A 遺跡遠景（南西方向より）

B 発掘風景

A　第1号竪穴住居跡（北西方向より）

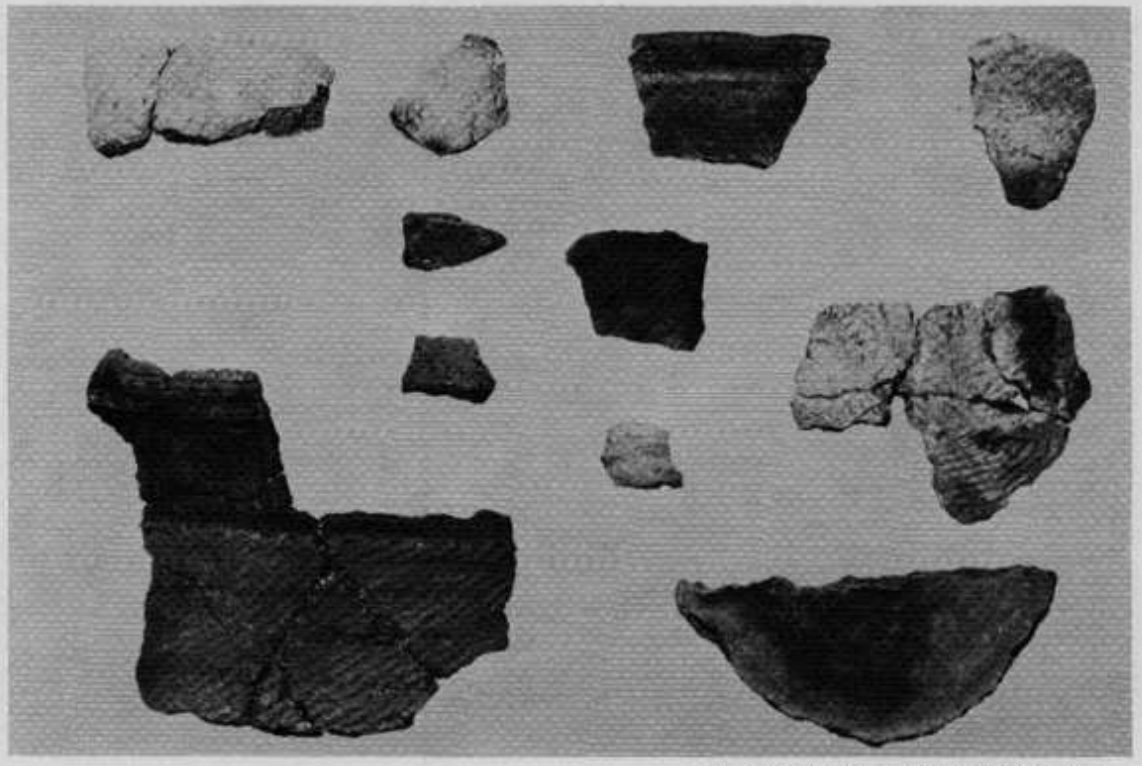
B　第1号竪穴住居跡焼土

A　第2号竪穴住居跡（南東方向より）

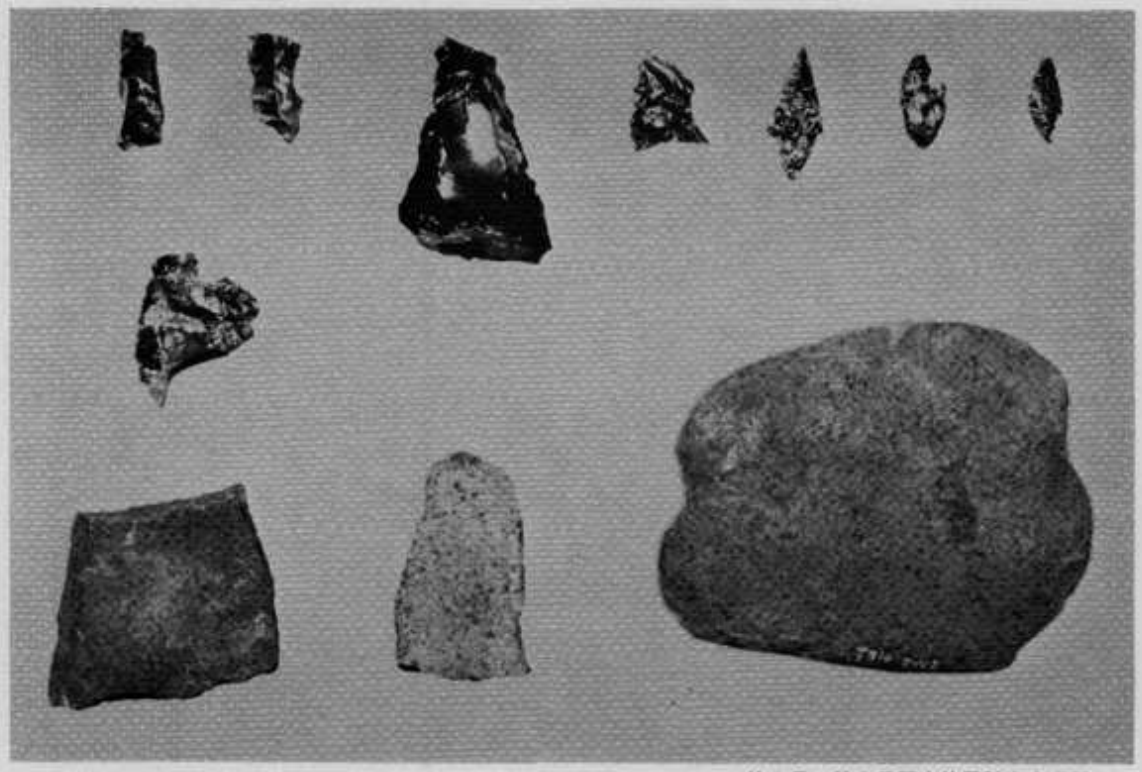
B　第2号竪穴住居跡（南西方向より）

A 第2号ピット（北西方向より）

B 第3号ピット（南東方向より）



A 第1号，第2号竪穴住居跡出土土器



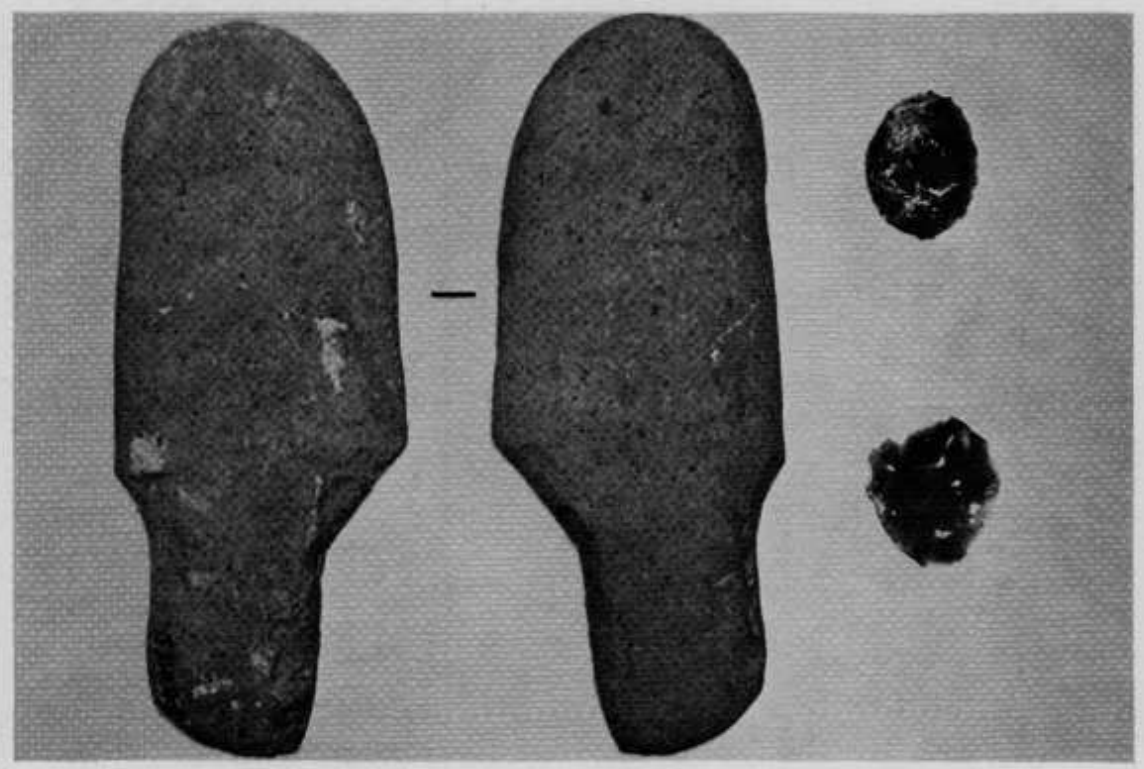
B 第1号，第2号竪穴住居跡出土石器

図版7

B　発掘区出土完形土器

A　第2号竪穴住居跡出土剥片

C　発掘区出土土器



発掘区出土石器

札幌市文化財調査報告書 Ⅶ

T 310 遺 跡

昭和49年8月25日 印 刷
昭和49年8月31日 発 行

発行者　札 幌 市 教 育 委 員 会
札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所　三 陽 印 刷 株 式 会 社
札幌市西区手稲東3北2丁目